

明治神宮附日本研究奨学生レポート

日本陶磁蒐集のネットワーク

— A・W・フランクスを中心に —

福 永 愛

一、序論

大英博物館学芸員オーガスタス・ウォラストン・フランクス（一八二一—一九七）は、十九世紀英国において日本陶磁を蒐集し、研究した先駆者である。彼の集めた千点を越える日本陶磁は、当時最も早く成立した包括的なコレクションであり、作品の研究と寄贈によって、国立博物館の発展とコレクションの充実に貢献するものであった。今なお、このコレクションは大英博物館の日本陶磁コレクションの約半数を占めており、現在の博物館における日本文化理解においても重要な役割を担っている。

同時代の著名な日本陶磁コレクターと異なり、フランク

スは一度も日本を訪ねたことがない。いかにして膨大なコレクションが築かれ、作品が理解されていたのか。近年、ニコル・ルーマニエール氏によって、大英博物館日本部門に保管されているフランクス史料の存在が明らかにされた^①。本稿は、これらの一次史料に基づき、社会学において発達したネットワーク理論を応用し、フランクスの日本陶磁コレクションの形成を、フランクスと同時代に生きた人々との協同的な機関的蒐集として論じる。まず、公による蒐集を私的な蒐集と深く結びつけた行為として考察した上、日英両国で活動した様々な個人とのフランクスのネットワークからコレクションの形成過程を検証する。

二、機関的蒐集と私的蒐集

機関による公のための蒐集は、個人の私的な蒐集と対立する、あるいは上位のものとして位置づけられがちである。しかし、フランクスは公の組織に属しながら、それまで博物館において蒐集対象として見られてこなかった分野の充実に図るため、自費で作品を蒐集、寄贈した。よって、彼の蒐集を捉えるためには、公私を二項対立的に捉える既存のモデルから離れ、私的な蒐集を含んだ機関的蒐集のあり方を探る必要がある。

個人コレクターによる同好会はフランクスにとっても重要な情報源であった。彼は一八六六年に発足したバーリントン美術クラブ創設会員の一人でもあるが、フランクスによる大英博物館のための蒐集と、コレクターの私的な集いにおいての活動は並行している。彼が『東洋の磁器と陶器コレクション目録』第二版を出版した一八七八年には、クラブでも『日本と中国の美術』展が開催され、フランクスは日本陶磁三点を出品した。レイチェル・ワード氏は、個人コレクターたちとの議論と交流は、後に国家へ寄贈される可能性を秘めた在野のコレクション形成を促す役割も果たしたと分析している。個人コレクターの蒐集もフランクスの機関的蒐集の延長線上にあるものといえよう。

三、駐日外国人・在英日本人とのネットワーク

英国での美術界の動きに加え、駐日外国人らは、日本の作品と知識の提供元として重要な役割を果たした。しかしながら、作品や知識の媒介の多くは私的な領域で行われたため、大部分の行為は表立たない。また、日本文化に関する活動は必ずしも彼らの職業と結びついたものではない。よって、傑出した日本研究家などの地位に認められない限り、彼らの貢献は忘れ去られがちである。

ヴィクトリア朝時代の英国人外交官は日本の情報と作品の蒐集にかかせない存在であった。中でもアーネスト・M・サトウ（一八四三—一九二九）は、フランクスの知識とコレクションの形成に最も影響力を与えた外交官である。大英博物館に保管されているサトウからフランクスへ宛てた手紙からは、サトウの外交・学術ネットワークが日本からイギリスに最新情報を伝達し作品を運ぶ文化的中枢としての役割を担っていたことが窺える。このことは、フランクスが言語の障壁や日本からの距離にも拘わらず、コレクションを形成できた一つの理由である。例えば、一八七六年には、サトウは日本陶磁の鑑識者であった蜷川式胤（一八三五—八二）のフランクス宛の手紙を英訳し、双方の意思疎通を可能にしている。この時、蜷川は手紙と合せて瀬

戸茶入、京焼の青磁茶碗を送っており、この二点の作品情報はフランクスの『東洋の磁器と陶器コレクション目録』

（二八七八）に記載されている。蜷川は一八七一年に外務省外務大録となり、各国代表団との接触があった。外交・文化面の友好のため、蜷川は日本陶磁を海外の博物館や駐日外国人らに送っている。サトウが作品の移動を仲介したのは蜷川のみではない。八〇年頃には、オックスフォード大学留学中の南條文雄（一八四九—一九二七）がサトウを介し、フランクスが求めた美濃焼の急須を送っている。南條は笠原研寿（一八五二—一八三）とともにフランクスの『東洋の磁器と陶器コレクション目録』執筆の協力者であった。彼らの洋行は、若者をインドや中国を含めた海外に送り仏教研究を進展させるプログラムの一端であった。二人は七九年に梵語研究を始める前にロンドンで英語を学んでおり、その頃フランクスと出会ったことだろう。

サトウは日本アジア協会の創立メンバーであり通信員でもあった。フランクスは会員ではなかったのだが、一八七八年には名誉会員に任命されている。この年の報告書では、さらなる前進が必要な日本研究の分野が列挙され、その中には中国・インドとの比較における日本の美学が含まれていた。フランクスの抜擢は、一八七六年、七八年に発行された日本陶磁を中国陶磁と比較した目録が、当時の日本研

究の空白を埋めたと評価されたからではないだろうか。そしてその背後にはフランクスと親しいサトウの後押しがあったのではないか。

フランクスの著『日本の陶器』（二八八〇）では、ドイツ人学者・フンクの茶の湯に関する論文が参照されている。フランクスはこの頃から茶の湯の美学を日本陶磁の生産・賞翫を支えるものとして重要視しており、フンクの論文はフランクスの日本陶磁に対する捉え方に変化をもたらした。このフンクとは東京医科学校で一八七三年から三年間語学教師を務めたヘルマン・フンクである可能性が非常に高い。彼は一八七三年に日本で創立されたドイツ東洋文化研究会会員であり、日本の儀礼に関する記事を投稿した。一八七〇年代に日本で活発化してきた駐日外国人による日本研究は、出身国の違いを越え共有され、フランクスの日本文化理解に影響を与えている。

A & Dヘーヤは、一八七〇年代から八〇年代にかけてフランクスへ東アジアの陶磁や根付を販売した重要な古美術商である。A・J・ヘーヤ、D・J・ヘーヤ兄弟からなるこの業者がフランクスに宛てた請求書が、今なお大英博物館に残されている。ヘーヤから購入されたやきものの一部はフランクスの『東洋の磁器と陶器コレクション目録』第二版に記録されており、例えば、京都・岩倉山窯による仁

清風の黒茶碗からは印を転載し、窯の歴史の説明と合わせて鑑定に寄与する参照作品としている。

ヘーヤの詳細は長らく不明であったが、当時の駐日外国人名簿などから、A・J・ヘーヤが商業面のみでなく、外交面、学術面においても日本と関わりのある人物であったことが判明した。一八七二年にはヘーヤ兄弟は江戸に滞在する業者であった。しかし、一八七五年にはA・J・ヘーヤは東京開成学校創立者である佐野鼎（一八三二—七七）に教師として雇われ、七九年からは、一橋大学の前身である東京高等商業学校で商業英文の教師として定年まで勤めた。彼こそロンドン生まれのアレクサンダー・ジョセフ・ヘーヤ（一八四七—一九一八）であり、一八六八年に来日し、プロシア公使館での通訳、貿易会社ウォルシュ商会で雇用されるなどした後、公立や私立の機関で教職についた。フランクスは一八七七年から翌年にかけてヘーヤから大量に作品を購入しているが、A・J・ヘーヤにとって日本陶磁の取引は安定職に就くまでの間の副職であった可能性がある。彼の雇用主であった佐野は七七年に亡くなり、この時期の雇用状態は不安定であったと考えられるからである。蜷川親正は、ヘーヤなる人物が、シーボルトやワグネルといったお雇い外国人らとともに蜷川式胤からやきものを贈られていることについて言及している。ヘーヤの多様な職

歴によって知り合った日本人の陶磁器収集家、日本陶磁を集めたり売り込んだりした外国人らとの結びつきが陶磁器輸出事業のきっかけとなったのではないのか。

フランクス史料からは、日本美術コレクターを通じた作品の入手も確認できる。チャールズ・ジョン・トッド（一八五五—一九三五）は、一八九〇年から九二年まで日本に滞在した牧師である。彼の日本美術コレクションは、没後一九三九年に大英博物館に寄贈されたことが知られていた。加えて、トッドの手紙とフランクスのイラストのメモからは、トッドが一八九〇年代にもフランクスへ一六点の日本陶磁を送っていたことがわかる。彼が作品とともに宛てた手紙からは、明治の初めには生産停止していた陶磁器に対してトッドが関心を持っていたことが知られる。送られた陶磁器の生産地は九州から北海道まで、器種は茶道具、酒器、刺し身皿などと様々である。フランクスは網羅的に陶磁器を蒐集してきたが、この方針は他の個人コレクターがフランクスを通じて博物館へ寄贈や売り渡しを考える際にも共有されていたといえる。

四、結論

フランクスは、大英博物館の内外で様々な人物と協力し、作品を集め、研究してきた。その交流は美術・考古学を専

門とする人々の輪に留まらない。彼の日本陶磁コレクションは、公的、私的な領域で活動する国籍の異なる様々な人々との結びつきの連続によって形成されていた。個々の作品と知識の蓄積と選択の動きは、一コレクター、一機関をも一つの構成要素とする地域を超えた大きなネットワークの中において理解する必要があるだろう。

五、謝辞

明治神宮日本研究奨励学生として、ロンドン大学SOAS博士課程一年次の研究を支援頂き、心より感謝しております。また、大英博物館日本部門には、フランクス史料調査の機会をいただき御礼申し上げます。

註

- (1) ニコル・ルーマニエール「国のための蒐集：A・W・フランクスと大英博物館所蔵日本陶磁器コレクションの形成（一八七五—一八八〇年を中心に）」『ジャポニスム研究』三五、二〇一五年、二五—二四頁。
- (2) Burlington Fine Arts Club, *Exhibition of Japanese and Chinese Works of Art* (London: Printed for the Burlington Fine Arts Club, 1878).
- (3) Rachel Ward, "Islamism, Not an Easy Matter", in A. W. Franks, *Nineteenth-Century Collecting and the British Museum*, ed. Marjorie Caygill and John Cherry (London:

- British Museum Press, 1997), 276.
- (4) Augustus Wollaston Franks, *Catalogue of a Collection of Oriental Porcelain and Pottery*, 2nd ed (London: South Kensington Museum Bethnal Green Branch, 1878), 205. Franks, 1492. Franks, 1494.
- (5) 'Report of the President and Council of the Asiatic Society Laid before the Members at the Annual Meeting Held in Tokyo, 22nd June, 1878', in *Asiatic Society of Japan Transactions*, vol. 6, 1878, iii.
- (6) Augustus Wollaston Franks, *Japanese Pottery: Being a Native Report with an Introduction and Catalogue* (London: Chapman and Hall, 1880), 3. Funk, 'Ueber die Japanischen Theegesellschaften Cha No Yu', *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, Hft 6 1 (1876 1873): 41-45.
- (7) Franks, *Catalogue of a Collection of Oriental Porcelain and Pottery*, 1878, 178, 231.
- (8) 蜷川親正「モースの日本コレクションと蜷川式胤」『人類学雑誌』八七（三）一九七九年、三三〇頁。
- (9) R. S. Jenyns and Basil Gray, 'The Todd Collection', *The British Museum Quarterly*, 1939, 70-72.